AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 () 平成19年度:20.

緩和ケア医療における告知のあり方としての一事例 : 在宅移行できた終末期患者を最期まで支えた思春期にある子供を対象として

小倉笑子

緩和ケア医療における告知のあり方としての一事例

～在宅移行できた終末期患者を最期まで支えた思春期にある子供を対象として～

８階東ナースステーション

○　小倉笑子

患者・妻の希望にて子供に告知・在宅療養し、家族関係の強化、信頼関係を構築できた事例を報告する。

Ａ氏、壮年期の男性、癌のため治療中であったが、徐々に全身状態の悪化、疼痛増強がみられた。家族構成は妻・思春期の子供２人である。

患者自身の強い疼痛、進行する病状への家族の不安に介入した。長年妻は子供へ告知すべきか悩み、また妻自身も不安を打ち明けられる対象を求めていた。子供たちも父親の変化に対し不安を感じ、面会時医療器具を装着された父の様子をみて流涙するなどの不安反応もみられた。まず家族の現状把握、長年の労を労うこと、予測される辛い心境への共感など妻の思いを傾聴、受容した。疼痛管理がつき患者自身の意思も明確になり、患者・妻・医療者の意思も一致し、子供たちへ告知（父親の現状・治療・可能性・協力して欲しいこと）した。始めは非言語的表出（泣く・鼻をすする）がみられ、その後父親のベッドに上り談笑・触れ合っている姿もみられた。患者の疼痛管理ができてくると共に、家族の中にも在宅を視野にいれた役割行動・明るい表情、言動もみられ調整を経て自宅に戻り、約４０日を自宅で過ごすことができた。

終末期にある親の現状を思春期の子供へ告知することは子供自身受け入れられるかという慎重な検討が必要となる。今回の事例でも検討を重ね施行し、最終的に父母を支える在宅での重要な援助者となった。